

科学研究費助成事業（基盤研究（S））事後評価

課題番号	18H05221	研究期間	平成30(2018)年度 ～令和4(2022)年度
研究課題名	木簡等の研究資源オープンデータ化を通じた参加誘発型研究スキーム確立による知の展開	研究代表者 (所属・職) (令和5年3月現在)	馬場 基 (独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・室長)

【令和5(2023)年度 事後評価結果】

評価		評価基準
○	A+	期待以上の成果があった
	A	期待どおりの成果があった
	A-	一部十分ではなかったが、概ね期待どおりの成果があった
	B	十分ではなかったが一応の成果があった
	C	期待された成果が上がらなかった
<p>(研究の概要)</p> <p>本研究は、歴史学をはじめ多様な学問分野で重要な役割を果たしている木簡関連の研究資源について、3つの取り組み、すなわち(1) IIF 準拠による歴史的文字情報化の標準仕様の提案、(2) 奈良文化財研究所が所有する日本最大の木簡研究資源のオープンデータ化、(3) 研究資源共有の国際的潮流を惹起し、参加誘発型スキームの確立を通じて国・分野を超えた多様な研究資源の蓄積を加速させ、質量ともに拡充した研究資源にビッグデータ解析手法等様々な分析を実施することを進め、従来の枠組みを超越した「研究資源の双方向的共有へのパラダイムシフト」を目指すものである。</p>		
<p>(意見等)</p> <p>本研究の目的である「木簡」を主な対象に、多様な関心からの知の蓄積と共有を双方向的に可能とする参加誘発型のスキームを確立し、そこに集積された知による当該分野研究の飛躍的向上は、「国際的な歴史的な文字連携検索体制の実現と公開」、「市民参加型アプリによる多様な研究資源の蓄積の加速化」、「深層学習による木簡文字の鮮明化・認識システムの開発と公開」といった研究成果に結びついており、当初の目的は達成されたと判断する。加えて、本研究は「同一の木簡に由来する断片化した木簡を収集するシステム」の開発という成果も上げており、削屑を新たな研究資源とすることが可能となるなど期待以上の成果があったと評価できる。</p>		